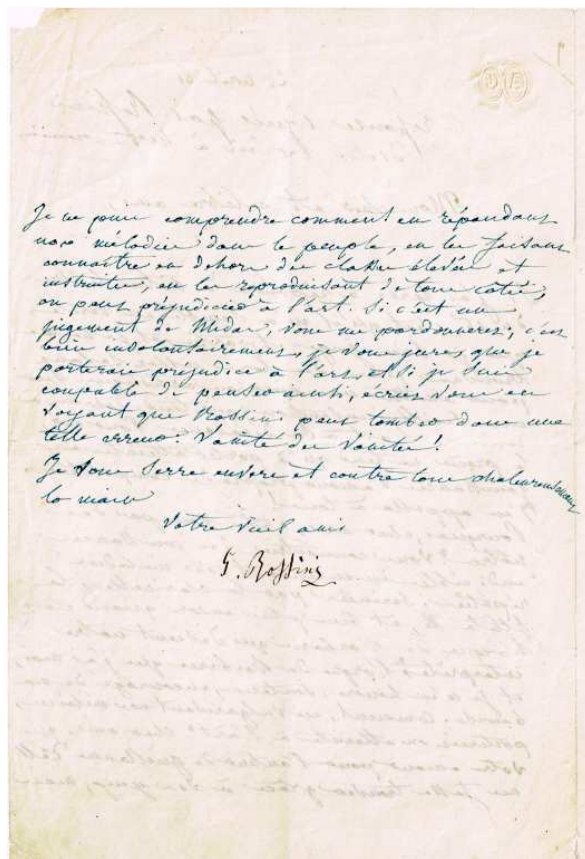
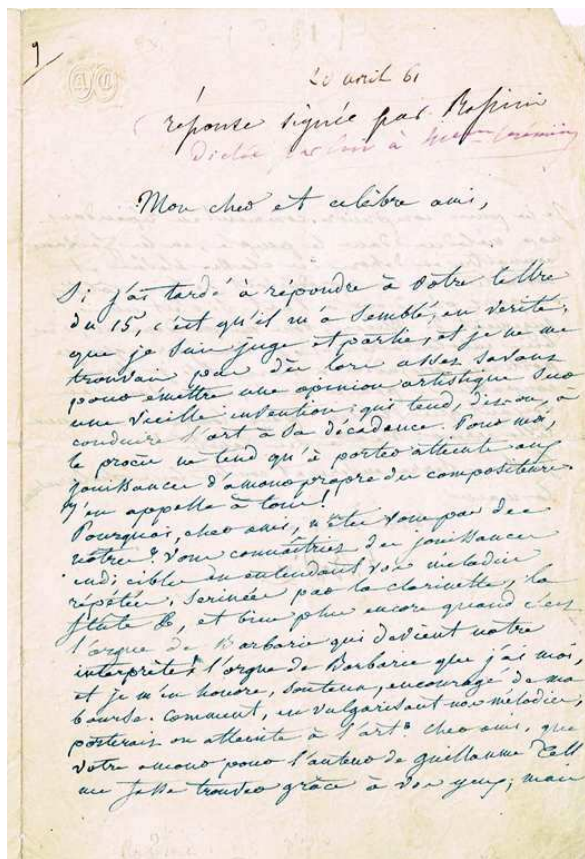


ロッシーニの書簡、自筆署名入り [1861年4月20日付]

(水谷彰良コレクションより)

ロッシーニの署名入り書簡 不詳(判読不明)の友人宛、[1861年4月20日付]



A "Mon cher et célèbre ami" Lettera fermata di Gioachino Rossini [Paris, 20 avril 1861.]

[Collezione privata di Akira Mizutani - Tokyo]

解説

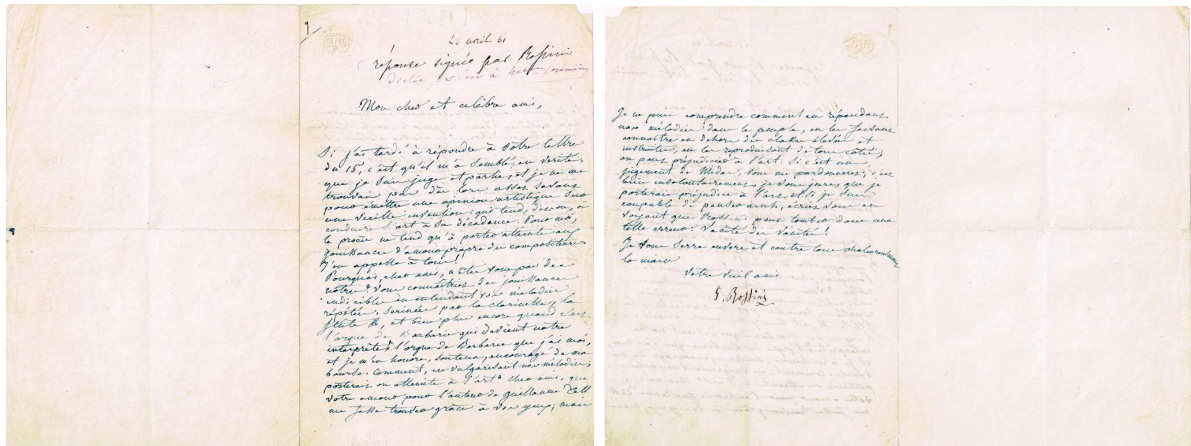
「Mon cher et célèbre ami」で始まるこの書簡は、文面が不詳の第三者による代筆で、署名のみロッシーニ自筆である。冒頭の日付(1861年4月20日)の筆跡は文面の筆跡と異なり、紫色のインクで書かれた第四の筆跡があり(表面の3行目)、その末尾の判読不明の名前がこの手紙の受け取り人(宛名に当たる人物)と思われる。用紙サイズは20.5×26.8 cm。上部余白の印章(空押し印)はロッシーニのイニシャル「GR」と思われるが、前年の書簡のそれとは形状が異なる(筆者所蔵のスティーンズ宛、1860年8月24日付の印章と比較されたい)。文章は表面の右半分と裏面の左半分に書かれているが、宛名や住所の記載はない(全体の複製は本稿末尾に掲載)。

これは15日に受け取った手紙が質問書への返書で、芸術を退廃[デカダンス]に導くと言われる古い作品について自分は意見を述べる立場にないので返事が遅れたと前置きし、旋律的な音楽が芸術を墮落させたとの批判的論調に反論する形で、「あなたはクラリネットやフルートなどによって繰り返されるあなたの旋律を聞きながら、言葉に尽くせぬ満足をおぼえているはずです。[中略]私たちの旋律が大衆の中に流布し、教養ある上流階級以外の人々にそれが知らされ、至る所でそれが複製されていることがどうして芸術を害することになるのか、私には理解できません。それがミダースの審判なら、あなたは私を許すでしょう。私がうっかり、私は芸術に害をもたらしますとあなたに断言し、そう考えることで私が有罪なら、あなたはそれを見てロッシーニはそうした過ちに陥っているとお書きいただいて結構です：なんと空しき！(vanité des vanités!)²⁾」と記している。

この書簡を読み解く鍵は、「芸術を退廃に導く古い作品」、「芸術に害をもたらす旋律」などの言葉の他に、「1861

年 4 月 20 日」の日付にある。なぜなら前年パリ・オペラ座の《タンホイザー》フランス初演への賛否が叫ばれ、ヴァーグナーのロッシェニ訪問をめぐって複雑な和声のヴァーグナーを持ち上げる芸術家たちが、ロッシェニを心地よい旋律で音楽を墮落させた張本人と批判したからである。ロッシェニはこの問題に沈黙を守ったが、ヴァーグナーと親しいカラーファを晚餐に招待したロッシェニがドイツ風平目料理と称してソースだけを出し、「君の好きなヴァーグナーの音楽には旋律がないから、魚の無いソースのようなもの」と述べたという話が新聞に掲載され、ロッシェニを悩ませていた。

《タンホイザー》のパリ初演は 1861 年 3 月 13 日にオペラ座で行われたが、反対派の妨害もあり同月 24 日の第 3 回を最後にヴァーグナー自身の求めで演目から外された。ロッシェニは上演に列席せず、沈黙していたが、パリ初演の翌月新たに見解を求められ、しぶしぶこの返書を知人に代筆させたものと思われる。こうした議論を嫌うロッシェニの心境は、旧約聖書から引用した最後の言葉（なんと空しき！）に良く表れている。「コヘレトの言葉」には、虚栄心による知識や営為はすべて空しい、太陽の下に新しい物は何一つ無い（新しいものを生み出したと言う者は、自惚れにすぎぬ）、仲間に競争心を燃やして労苦するのは空しい、といった言葉が数多くあり、芸術競争に対するロッシェニの本音を付度することができる。



(2014 年 11 月作成。水谷彰良)

¹ アポロンの豎琴よりもパーン（牧神）の素朴な笛の旋律が優れていると判定し、耳を「ロバの耳」にされたミダース王の故事にちなんだ言及。
² 旧約聖書の「コヘレトの言葉」第 1 章の「なんと空しい！ すべては空しい」に起源を持つ言葉（ロッシェニ時代のフランス語訳の一つは「vanité des vanités! tout est vanité」）。